

御用役者増阿弥をとりまく環境

——二つの『増阿弥画像賛』から——

天野文雄

室町時代の能役者には、禪林の慣習にな

らって賛をそなえた画像が制作されること
が少なくなかったようである。室町時代の能
役者で画像が制作されたことが判明してい
るのは、「音阿弥画像」（希世靈彦『村菴藁』）、「観
世小次郎信光画像」（景徐周麟『翰林葫蘆
集』）、「遊阿弥画像」（同）、「宮増弥左衛門親
賢画像」（能楽研究所観世新九郎家文庫蔵）の
四例であるが、このうち、画像が伝存してい
るのは最後の『宮増弥左衛門親賢画像』だけ
である。これらについては画像賛が伝わるのみ
で、他の三点については画像賛が伝わるのみ
である。これら画像や画像賛はもちろんそ
れぞれが能楽史研究上の有用な資料であるが、
ここでは新たに、將軍義持の強力な後援をう
け、円熟期の世阿弥のライバル的存在だった
増阿弥の画像賛二点を紹介して、増阿弥をと
りまく環境などについて考えてみたい。

ここに紹介する二つの『増阿弥画像賛』は、
いずれもその画像は伝存が知られていないも
のであるが、その一つは、惟肖得巖の『東海
瓊華集』の絶句を集めた冊にみえるつぎのよ

うな五言絶句である。

奉相府命賛増阿畫像

歌舞一朝翫、畫図千載恩、明時誰不奮、薄
伎達君門

詞書によると、この絶句は惟肖得巖が相府
（將軍）の命令によって増阿弥の画像に賛着す
べく制作したものであり、「増阿弥画像」の賛
であることが知られる。賛の意味は、「能芸が
將軍に愛好されて、役者の画像が描かれると
いう大変な君恩に浴することとなった。この
ような泰平の御代には誰もが発奮するものだ
が、その結果、しがない能芸についても君の
注目するところとなったのだ」というような
ことであろう。

この賛の作者惟肖得巖は、『五山文学新集』
第二卷の玉村竹二氏の解題によると、延文五
年（一一三六〇）の生まれ、臨濟宗松源派の一
派たる皷慧派に属し、応永十八年（一四一一）
以降は相国寺・萬寿寺・南禅寺・天龍寺など
に歴住し、応永二十八年（一四二二）には「五
山之上」たる南禅寺の長老にも就任して、永

享九年（一四三七）に行年七十八をもって没
した人物である。詩文は絶海中津に学んで令
名高く、応永十五年（応永三十五年（正長元
年））の義持時代には、真摯な禪の求道者で
あった義持を中心に催された文雅の会の常連
の一人であり、義持の信任すこぶる篤い僧で
あった。右に記した応永十八年以降の五山歴
住もすべて將軍義持の意向によるようである。

増阿弥は児役者時代から義満の周辺で活動
しているが、このような惟肖の関歴（義持と
の親密な関係）と、応永十九年ころから顕著
になる義持の増阿弥後援（毎年勸進能の後
援など）をふまえると、右の詞書の「相府」は
義満でなく義持のこととしてよいであろう。
おそらくは、賛だけでなく、増阿弥の画像も
義持の命令によって制作されたものと思われ
る。また賛の第四句の「薄伎達君門」なる文
言は、この画像の制作が、義持の増阿弥びい
きが始まってまもないころであることを思わ
せる。義持の増阿弥後援が顕著になるのは前
述のように応永十九年ころからであるから、
制作時期は応永十九年をそうくだらないころ
であろうか。

この画像賛は、賛の制作（おそらくは画像
の制作も）を命じたのが義持であるという点
で、まずなによりも、これまでも知られてい
た義持の強力な増阿弥後援をさらに補強する
資料であろう。景徐周麟の『遊阿弥画像賛』に
よると、義持は「松阿」なる田楽役者を寵愛

していたことが知られる（松阿の子が画像贊の遊阿）が、これもおそらくは増阿弥寵愛と一体のこととみてよいと思われ（増阿弥は田楽新座の役者である）、応永十九年以降の義持の周辺には、増阿弥を中心に多くの田楽系役者が集められていたことがうかがえる。また、この画像贊は惟肖得巖と増阿弥とのあいだに交流のあったことをも伝えている。義持愛顧の役者であれば惟肖のような禅僧との交流は当然想定されることではあるが、それがこのように具体的な形で示されたことの意味は決して小さくはあるまい。両者の交流は、世阿弥が「冷えに冷えたり」（『申楽談儀』序）と称賛した増阿弥の芸のよって来るところを考えるのに有力な視点を提供するであろうし、それはまた、増阿弥だけでなく、世阿弥をとりまく環境でもあったと思われるからである。

なおこの画像贊の「薄伎」は、さきにも記したように「能というしがない芸」の謂と思われるが、これは能および能役者がこの時期に惟肖得巖のような禅僧からどのような目で見られていたかを伝える点で、例の『後愚昧記』の「乞食の所行」とともに、興味深い資料と言えよう。

もう一つの『増阿弥画像贊』は禅僧歌人正徹の詠草で、それは南朝を代表する歌人であった宗良親王（後醍醐天皇皇子）の歌集である『宗良親王千首』の編末に書き込まれた、つぎのような和歌である。

増阿尺八の影

一ふしに五のしらへある竹のよにたくひ
なきねをのみそ啼 正徹

この記事をもつ『宗良親王千首』は、はやく八代国治氏『長慶天皇御即位の研究』（大正十三年）によって紹介されていたが、正徹研究の立場からこの記事に注目した稲田利徳氏の『正徹の研究』（昭和五十三年）によると、この記事は正徹没後十四年の文明五年（一四七三）の書き込みで、この詠草は『草根集』などの正徹の歌集にはみえないが、正徹が増阿弥の画像のために制作したもの、とされている。もっとも、稲田氏は、この『宗良親王千首』の「増阿」を心敬の『ひとりごと』に尺八の名手としてみえる増阿弥のこととされ、能役者の増阿弥とは別人とされておられる。

もしそうであるなら、これは二つめの増阿弥の画像贊ではないことになるが、稲田氏も言及されているように、『ひとりごと』所見の尺八の名手の増阿弥と能役者の増阿弥は活動の時期も重なっており、能役者の増阿弥は『尺八の能』（現在は廃絶）で実際に尺八を吹いてもいること（『申楽談儀』などを勘案すると、両者は同人とみて少しもさしつかえあるまい。また、それが現在の能楽研究の一般的な見解でもある）。

正徹の詠草が賛として付されたこの『増阿弥画像』が、いつどのような事情のもとに制作されたかは不明であるが、ここからは増阿

弥と正徹との交流という、まことに興味深い事実が想定される。それは今後、増阿弥の歌壇や禅林との交渉を考える場合にも、不可欠の視点となるであろう。また、この画像の絵柄は「増阿尺八の影」の注記から尺八を演奏している増阿弥の姿だったことが確実であるが、これは『ひとりごと』とともに、増阿弥が尺八の名手だったことを伝えるよい資料でもある。

以上、二つの『増阿弥画像贊』を紹介して、おもに増阿弥をとりまく環境について述べてみたが、そもそもこのように二点もの画像が制作されていたこと自体、増阿弥の役者としての評価の高さを物語るものであろう。これにたいして、同時期に能作・理論とも円熟期にあった世阿弥には、いまのところ画像が制作されたことを示す資料は知られていない。単純な比較はできないが、このような画像の伝存状況は、あるていど御用役者としての増阿弥と世阿弥についての評価を客観的に伝えているように思われる。また、御用役者という視点からみるならば、これまでの増阿弥についての新しい知見は、ひとり増阿弥だけでなく、増阿弥と同じ御用役者の立場にあった世阿弥をとりまく環境でもあるということも、あらためて強調しておきたい。

（大阪大学教授）